

現代の水球選手が考える水球観の認識状況について その1  
—高校生を対象として—

本田 小晴 (競技スポーツ学科 コーチングコース)  
指導教員 村田 正夫

キーワード：水球, 競技意欲, 価値観

### 1. 緒言

水中の格闘技とも呼ばれる水球は、ヨーロッパを中心に人気のある競技として世界各国に定着しつつあり、オリンピック種目にも選ばれている。しかし、日本での知名度は低く、競技人口も少ないことから人気のあるスポーツではないと考えるのが一般的である。そこで、これから日本の水球をメジャースポーツにする為の施策の一つとして、競技力の向上が挙げられる。

本研究では、水球の競技力向上についての諸施策を検討するにあたり、選手の水球観(競技意欲)についてターゲットを絞り、まずは高校生の実態調査を行い、その傾向を探ることを目的とする。

### 2. 研究方法及び研究対象

関西地区の水球部に所属する高校生4チーム計44名を対象に、TSMIを基に独自のアンケートを作成し①努力指向性②自己コントロール③試合不安④コーチ抵抗性⑤コーチ受容⑥研究心⑦勝利追及⑧闘争心の8項目について調査を行い、高校生の水球観に関する認識状況について把握することとした。集計は単純計算とし、配布枚数48枚に対し、有効枚数44枚(回収率91.6%)であった。

### 3. 結果と考察

調査を実施した高校生たちは、水球についてレクリエーションを目的とする生涯スポーツ思考の者が多いことが分かった。このことからまずは、競技

スポーツとして楽しめるように育成していくことが望まれるであろう。さらに、水球は他の競技と比較して試合数が少ないことが分かっている。試合は練習してきたことを発揮する場であり、それが少なければ目標を見失い、楽しい練習を求めてしまうと考えられた。このためには先ず、競技人口の増加が不可欠であろう。選手たちが水球を競技スポーツとして考え、意欲的に取り組んでいくことが今後の水球界における課題と言えるであろう。

次に、指導者に反抗心を抱く選手が多かったとの回答に対し、指導者に注意されて腹が立つという選手は少ないという結果となった。これは指導者に注意されることに慣れてしまい、関心が無くなっていることが考えられる。指導者の注意を聞き、受け入れることができなければ、選手たちの技術レベルの向上は難しいと言えるであろう。

### 引用・参考文献

・大淵泰宏著 「2008年度リサーチペーパー水球競技における新しい組織の創設 ～ワセダ水球クラブの立ち上げに向けて～」に関する研究 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科学系記2008年

・財団法人日本水泳連盟

<http://www.swim.or.jp/>